

安全・安心な学童保育を守る指導員の 仕事・役割を確かめる

—第37回全国学童保育指導員学校・東北会場を開催

真田 祐

全国学童保育連絡協議会 事務局次長

二〇一二年二月三日、全国学童保育連絡協議会（以下、全国連協）主催の第三七回全国学童保育指導員学校・東北会場が、仙台市内の宮城学院女子大学で開催され、五二五名が参加しました。岩手・宮城・福島の被災した地域からも多くの指導員が参加しました。

* * *

二〇一一年三月十一日の東日本大震災以降、東北で開催する指導員学校は今回で二度目を迎えました。自身も被災しているながら、学童保育に通う子どもとその家庭を守り、支えるために、日々、一生懸命、働いている指導員をどう支えていくのか——昨年と同様に、東北地域の学童保育連絡協議会が集まり、全体講演、講座の内容や参加の支援について話しあい、準備を進めました。

震災から一年八か月が経ちましたが、安定した暮らしが依然として戻らず、困難を抱えている地域は少なくありません。

子どもや保護者、指導員、それぞれにとつての安定した暮らしや生活を回復させていくこと、心のケアなどの課題が、より重要になってきているとも言われています。被災した地域では入所児童が増えており、安全に安心して生活できる学童保育がますます必要とされています。こうした現状をふまえて、今回の指導員学校も、つぎの内容で取り組むことになりました。

①被災した地域の指導員の困難に寄り添うために、子どもの心のケアと指導員自身の心のケアとなる内容にしていくこと（全体講義「こどもの毎日の生活を保障する指導員の仕事の大切さ」／特別講座「震災後のこどものストレスマネージメントと指導員のメンタルケア」を行う。講師は、宮城県内の被災した地域で発達障害や災害時の子どもの支援に取り組んでいる佐藤秀明先生——ここねつと発達支援センター理

事長・特別支援教育士スーパーバイザー）。

②被災した地域の取り組みからも学ぼう（宮城県石巻市が指導員と共に話しあつてつくりあげた「放課後児童クラブ防災の基本指針（*）」を、「子どもの安全対策」の講座で発表していた）。

③全国連協が協力を呼びかけている「東日本大震災学童保育義援金」を、県連協や学童保育緊急支援プロジェクトが活用し、被災した地域の指導員の参加費とともに、交通費用や交通手段もできるだけ援助する。

「毎日の生活の場」として安全に安心して過ごせる学童保育の役割や大切さをあらためて確認できる機会とすること。その仕事を担う指導員の役割の大切さを確認する機会にして、被災した地域で子どもたちを守る仕事をしている指導員を支えていきたいと考えました。

参加への支援にあたっては、NGOセーブ・ザ・チルドレンジャパンが、岩手県や宮城県からの参加者にバスを用意してくれました。

宮城県学童保育緊急支援プロジェクトは、「東日本大震災学童保育義援金」を活用して、福島県から宮城県に連なる沿岸の市町村からの参加者用のバスを用意することができました。また、大地震の被害や放射線の被害がある内陸部の市町村から参加する指導員にも支援を行いました。さらには、被災した地域の指導員にプロジェクトの「世話人」となってもらい、当日の要員として運営に参加していただくことをお願いしました。

岩手県学童保育連絡協議会、宮城県学童保育緊急支援プロジェクト、そして二〇一二年六月に結成された福島県学童クラブ連絡協議会は、被災した地域の市町村に出向き、行政担当者や指導員からお話をうかがって、どのような支援が

必要か、被災した方々に寄り添う支援とはなにかを確かめながら、参加を呼びかけました。

その結果、被災した地域からは二二〇名を超える指導員が参加されました。「研修会という場で、被災地の本当の声を初めて発信してもらえたと感じました」「子どもたちのサインに気づき、子どもたちと小さな喜びを見つめるだけでも、それが子どものメンタルケア、自分自身のメンタルケアにつながるなら、少しでもふんばりたい！ そう思える講演内容でした」（被災した地域の参加者の感想より）。

これからも、被災した地域の方々に寄り添った支援を息長く続けていきたいと思います。

*くわしくは、本誌二〇一二年七月号の七八ページもごらんください。